CONTENTS

1　●令和元年度立正大学 FD 活動を振り返って
2・3●平成30年度ベスト・クラス賞　受賞科目紹介
4　●全学 FD 研修
5　●大学教員の職能開発とＦＤ
6・7●教員インタビュー
「教育の質保証に向けた取り組みの実質化」
8　●令和元年度 FD 活動報告

Rissho University
FD News Letter Vol.24
March, 2020

令和元年度立正大学 FD 活動を振り返って

FD 担当副学長　宮川　幸三

本学では、2014年度より「大学教育再生加速プログラム」（Acceleration Program for University Education Rebuilding : AP）に採択され、全学的にアクティブラーニングの導入を進めてまいりました。2019年度は AP 推進事業の最終年にあたるため、今後の継続的な活動も見据えながら、FD 活動においてもアクティブラーニングに関連する内容を多く取り入れました。

アクティブラーニングの中でも効果の高い手法として、動画教材の導入およびそれを活用した反転授業があります。本学では、昨年度より「予習用動画導入研修会」を開催し、今年度は予習用動画導入授業を全学部において1科目以上実施することを義務付けてまいりました。さらに、多くの教職員に実際に動画教材を活用した授業を見学してもらうことにより、動画教材を活用した授業への理解を広め、今後の普及と教育活動の活性化を図ることを目的とし、「動画教材活用授業見学会」を実施しました。2019年6月19日～7月4日の期間に4回開催し、事前に動画教材を視聴した21名の教員と2名の職員が実際に授業を体験しました。出席者の方々にはアンケートを実施し、動画教材を活用することへの懸念事項などを回答していただきました。これらの結果は、来年度以降の更なる動画教材活用授業の普及に活かしたいと考えております。

この他に、12月13日には早稲田大学の向後千春先生をお招きし、「インストラクショナルデザインに基づく授業設計」というテーマで FD 研修会を行いました。これは、教員からの要望が多かった授業設計に関するノウハウを学ぶもので、詳細な授業設計に基づいて反転授業などの様々な授業方法を選択することにより教育の質向上を目指すものです。13名の教員と6名の職員が参加し、向後先生の講義とともにグループワークにおいて活発な議論がなされました。出席者のうち約7割の方からは有意義な研修であったという感想をいただきましたが、平日授業時間帯での3時間にわたる研修であったことから、「日程や時間帯の設定については改善の余地がある」といったコメントもいただきました。この点については、次年度以降の研修を企画する際に考慮する予定です。

このようなアクティブラーニングを中心とした授業内容の改善に直接関わる活動の他に、例年実施している「新任教職員 SD 研修会」（2019年6月5日）や、情報環境基盤センターが主催した研究会「EdTech を活用した新しい学び」（2019年10月5日）、「自己点検・評価入門研修会」（2020年1月21日）など、教育全般に関する幅広い FD 活動も行っています。

今後もより有効性の高い FD 活動を展開し、本学の教育活動の向上につなげてまいります。

平成30年度ベスト・クラス賞　受賞科目紹介
①教員インタビュー

〈概要〉
平成30年度授業改善アンケート結果より、第2期ベスト・クラス賞を受賞した「初等教科教育法（社会）」について、実際の授業の様子やインタビューを通して、授業設計のポイントや工夫をお伺いしました。

石橋　昌雄　先生
（社会福祉学部　特任准教授）

受賞科目：
「初等教科教育法（社会）」
（平成30年度第2期授業科目）

――この授業の目的を教えてください――

この授業は、将来小学校の教員を目指している学生が主に受講しており、特に社会科の教育法について学ぶ授業です。具体的には、小学校学習指導要領に示された「主体的・対話的で深い学び」を取り入れた問題解決型の社会科教育の授業を指導できることを目的としています。そのために、模擬授業、学び合い、ICTの活用など様々な手法を用いて、「考える力」を養う教師を育てるための指導をしています。今の学生は考えることに不慣れですので、学生自身にも考える力をつけられるよう工夫をしています。

――なぜ「考える力」が必要とされているのでしょうか――

「考える力」を養うことは社会科教育における最大の使命です。そもそも教師の役割を突き詰めると、これからの生き方を児童と共に考える職業であると思います。世の中の多くの事には正解はありません。正解は何かを考え続け、自分なりの答えを導き出すことが生きる上では必要です。この授業においても、学生に地域や社会のできごとについて考えさせること、または自分で自ら行動しながら考えさせることを念頭におき指導しています。まさに社会科教育で求められる「主体的・対話的で深い学び」を目指すものであり「アクティブ・ラーニング」そのものです。

――授業内容や構成の工夫をお聞かせください――

社会科の授業の基礎は、問題解決学習であり、本授業自体もそのような構成になっています。理論と実践が相互に組み合うように工夫しており、教員によるレクチャー（理論）と、全員に課している模擬授業や教員からの問いに対する思考（実践）を90分間のなかで展開しています。

また、毎授業においてテーマに沿った補助教材やデジタル教科書を使用しつつ、積極的な発言を促したり、ワークシートを課したりします。学生に発言をさせる際に重要なことは、①「自分の考えたこと」を自分の言葉で表現すること（発言やワークシート）②「自分の考えたこと」に全くの間違いはないことを学生に理解してもらうことです。これらを徹底的に学生に伝えることで、次第に自分の考えをしっかりともち、表現できるようになっていきます。

――授業の冒頭で、「今日の授業テーマ」を学生に明示していたのも印象的でした――

その日の学習テーマ・内容や到達目標を学生と教員両者で共通認識を持つことは、良い授業を作るために非常に重要です。教員にとっては、自らの授業の内容を再確認し考えや思想をはっきりさせることができ、教えるべき内容や方法が明白になります。学生にとっては、授業の目的が明確になることによって、学習意欲の向上につながります。反対に、これを曖昧にすると授業にもブレが生じるので注意が必要です。
そのためにもシラバスを具体的に記載するよう心がけています。教員がその授業の目的や到達目標をはっきりさせること、そのプロセスを緻密に15回の授業に落とし込むことで、密度の濃い授業を学生と作り上げることができます。

――学生の学習意欲を向上させる取り組みは他にありますか――

まずは、学生との信頼関係を築くことです。授業内はもちろん、授業前後のコミュニケーションも大事です。常に学生を観察し、授業への参加意欲や態度、理解度などを推察しながら授業を進めることも重要です。これらは特に大学教育の現場で見落とされがちなことですが、信頼関係が築けると、学生は授業を熱心に受けるようになります。また、自己肯定感の向上も、本学における教育では必要です。本学学生の特徴として、真面目さ、素直さ、粘り強さなどがあげられます。しかし、それに加えて自己肯定感がさらに向上すれば、学習意欲のみならず学習成果が飛躍的にアップするのではないでしょうか。

――今後の課題や将来の展望をお聞かせください――

立正大学の学生はとても真面目で教員の素質は十分にあります。今後も採用試験の合格率向上も視野に、ノウハウや知識の習得を進めます。併せて、教師としての人間性を高める指導を通して、質の高い小学校教員を輩出していきたいと思います。

――ありがとうございました――

インタビュアー
学長室総合経営企画課　　佐々木愛美

平成30年度ベスト・クラス賞　受賞科目紹介
②授業体験レポート　「初等教科教育法（社会）」（第15回）

イントロダクション

▶ 学びのテーマをはっきりさせ、クラスで目的を共有

この日の授業テーマは「主体的・対話的な学びの指導法を学ぶ」でした。教員からの「主体的・対話的で深い学びとは何か？」という問いかけに、学生は考えを巡らせます。

学生による模擬授業

▶ 実践機会の確保と多様なフィードバック

一人5分×6名の模擬授業を行います。
担当学生は、これまでの模擬授業における他の学生の**改善点や授業内容を反映し、工夫**を凝らします。
児童役の学生も**積極的に参加する**と同時に、授業の感想を細かくメモしています。

思考①

▶ 理論を学ぶ前に現状の理解度を把握

授業テーマを再確認し、**改めて学生に問いかけ**ます。教員から「**全員、自分の意見を発表**してもらう」と事前に伝えられたため、学生には緊張感がありつつも、自身の考えをしっかりと発表しています。

理論の説明

▶ 学生の理解度に配慮しながらレクチャー

スライド資料を使い、テーマに関する理論を学びます。
思考①で発言したりワークシートに書いたりした自身の考えの裏付けを得たり、誤解を解いたりしながら理解を深めていきます。あわせて、教員採用試験に関するポイントもここで押さえます。

観察学習

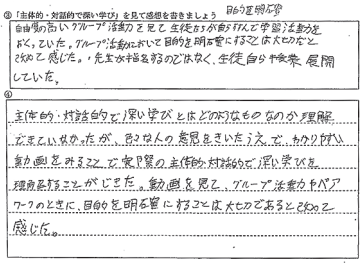
▶ 理論を手掛かりに事例研究

学んだ指導法が現場でどのように実践されているかを知るため、実際の授業を撮影した**動画を視聴**します。小学生が生き生きと学んでいる姿を見て、**改めて「主体的・対話的で深い学び」とは何か、その重要性を学んで**いるようでした。

思考②
クローズ

▶ 各自の学びの振り返り

授業を通して考えたことをワークシートに記入します。学びのテーマを明確にし、事前の理解度を把握したからこそ、授業を通して何を学んだのかがはっきりと浮かび上がります。**自身の思考をさらに深め、表現する力**が鍛えられているようです。


③「主体的・対話的で深い学び」を見て感想を書きましょう　自分の意見を明確に

自由度の高いグループ活動を見て生徒たちが自ら学んで学習活動をおこなっていた。グループ活動において目的を明確にすることは大切だなと改めて感じた。・先生が話を聞くのではなく、生徒自ら授業展開していた。

④

主体的・対話的で深い学びとはどのようなものなのか理解できていなかったが、色々な人の意見をきいたうえで、わかりやすい動画をみることで実際の主体的・対話的で深い学びを理解することができた。動画を見て、グループ活動やペアワークのときに、目的を明確にすることは大切であるとおもった。感じた。

〈体験雑記〉　－授業に参加して－

受講している学生のほとんどが、積極的に授業に参加している姿がとても印象的でした。学生の思考とそれを表現する時間が授業内に複数回あることは、良い緊張感を保つうえでも効果的であると感じました。（総合経営企画課）

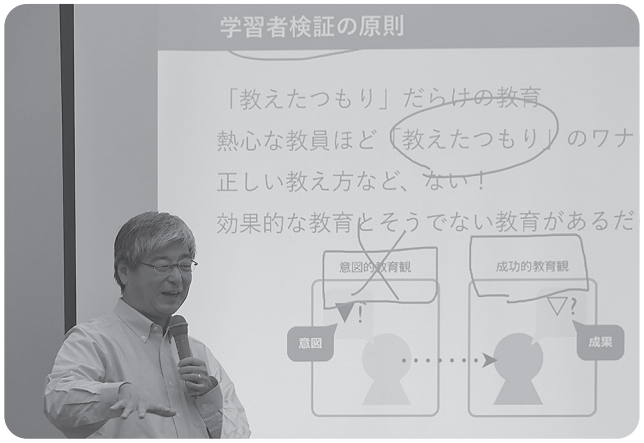
全学 FD 研修

「やる気と成果を引き出す授業デザイン」開催

学習者中心の授業づくりが謳われるなか、三つの方針に基づく教学マネジメントの機能化が求められています。各授業において期待される学習成果獲得にコミットした授業設計と、学生の学習意欲、学習行動のマネジメントは、教員の必須スキルとなっています。立正大学では「大学教員のためのインストラクショナル・デザイン入門」をテーマに全学 FD 研修を開催しました。

また本研修は、大学院設置基準の改正による「学識を教授するために必要な能力を培うための機会の設定又は当該機会に関する情報提供の努力義務化」に伴う、いわゆるプレ FD として学内の大学院生にも情報提供と参加の呼びかけを行いました。

「やる気と成果を引き出す授業デザイン」開催概要
日　程　令和2（2019）年12月13日（金）
　　13時00分　～　16時00分
場　所　品川キャンパス：第7会議室Ｂ
　　熊谷キャンパス：第1会議室（遠隔）
講　師　早稲田大学　人間科学学術院
　　向後　千春　教授
参加者　19名（教員：13名、職員：6名）



教え方を教えてもらえない大学教員

研修冒頭、大学教員は研究のプロフェッショナルである一方で、授業の設計法や指導法などを専門的に学んだわけではなく、個人の努力に依存している現状に触れ、「習得する技能に応じた効果的な教育」を実践するための基本理念の説明から研修が始まりました。

習得する技能に適した学習法を知る

授業設計の前提となるのは、どのような技能（知識・態度・技能）を習得させることが目的かを明確化することとの説明がありました。習得を目指す技能ごとに適した教え方があることを知り、授業でそれらを実践することが成果につながるコツとのことです（図1）。

３つの技能（ブルームの分類）

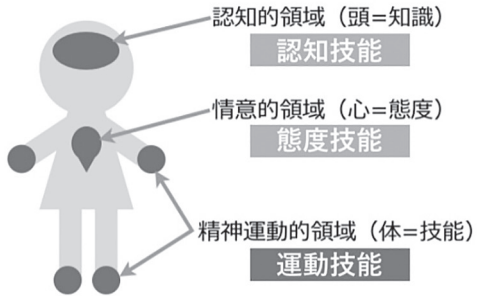


図1：ブルームの分類に基づく3つの技能

逆向きに授業はデザインする

授業を通じて求める成果を明確化し、その効果的学習法を確認した後、どのように授業に落とし込んでいくのでしょう。インストラクショナル・デザインでは、達成目標とその測定方法をまず定め、それをクリアできるよう達成要因を細分化しながら各回の内容を吟味する「逆向きデザイン」による授業設計が重要とのことでした（図2）。

逆向きデザイン（Backward design）

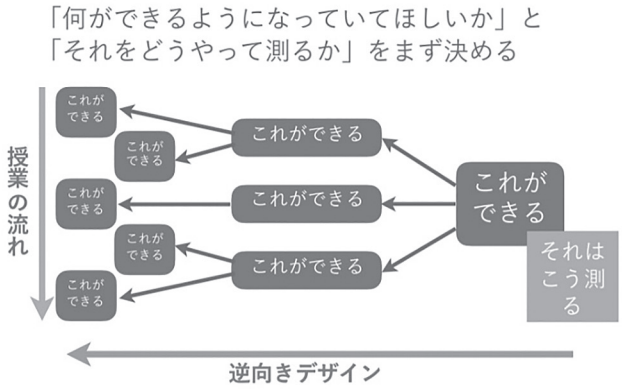


図2：逆向きデザイン

こうした目的に即した設計を行うことは、学習者である学生との合意形成に寄与します。毎回のゴールを授業冒頭に共有する、授業への参加の仕方とその意図を明示するなど、すぐに取り入れられる事例もたくさんご紹介いただき、大変有意義な研修となりました。

▶ 詳しくは Web へ（学内関係者限定公開）

動画を MediaDEPO にて公開中

MediaDEPO＞教職員用フォルダ＞FD 研修＞学内 FD 研修＞2019

大学教員の職能開発とＦＤ ――令和元年度ＦＤ推進ワークショップ――

日　時：【Ａ日程】令和元年8月6日（火）～7日（水）
　　【Ｂ日程】令和元年8月8日（木）～9日（金）
場　所：グランドホテル浜松（静岡県浜松市）
参加者：教員1名
テーマ：大学教員の職能開発と FD

当日プログラム：
1. 全体説明（オリエンテーション）
2. グループ討議
3. ワークシート作成と模擬授業

〈研修概要〉
　日本私立大学連盟主催の本ワークショップは、大学の専任教員となって概ね4年未満の方を対象に、担当科目の個別的問題の解決だけでなく、大学教員の職業的規範を明確にし、FD の実践的理解を参加者全員で共有する機会として開催されています。
　当日は、全体説明後に授業での工夫や改善点、学生とのコミュニケーションで心がけていること等を共有しつつ、参加者同士で意見交換会を行いました。その後、グループ内で模擬授業を実施し、コメントを出し合いながら多様な授業方法を共有しました。

－参加報告－

経済学部経済学科　宮岡　　暁

　私は去る8月6日～7日、グランドホテル浜松にて開催された「令和元年度 FD 推進ワークショップ（新任専任教員向け）」に参加した。別日程（8月8日～9日開催）と合わせてワークショップには35大学から88名の教員が参加し、2日間の間、7名ほどのグループに分かれて意見交換や模擬授業などを行った。私が同じグループとなった先生方は、国際経営学部・外国語学部・看護学部など様々な学部から来られており、民間企業での勤務経験を経て大学教員になられた方や看護師の資格をお持ちの方など、経歴も様々であった。以下では、今回のワークショップで取り組んだ内容とその感想について述べたい。

【1日目】
　最初に全体説明（オリエンテーション）があり、ワークショップの目的や「大学教員の職能開発と FD」をめぐる動向について説明が行われた。私自身、FD に対する理解度はまだまだ不十分だったので、ここでの説明を受けて FD の意味やその重要性についてより深く理解することができた。その後はグループに分かれ、事前に提出していた参加者プロフィールをもとに自己紹介を行いつつ、各自が普段の授業で実践している工夫や抱えている課題などについて情報共有と意見交換を行った。上述のように参加者の専門分野や経歴は様々であったが、私自身も含めてどの参加者も似たような課題や悩みを抱えていることがわかり、その点は私にとっては安心材料となった。グループ討議終了後は各自ホテルの自室へ移動し、翌日の模擬授業に備えて授業案の概要をワークシート（Ａ4版1枚）に記入する作業を行った。夜には懇親会が行われ、ビールグラスを片手にカジュアルなかたちで他の先生方と交流することができた。

【2日目】
　引き続きグループに分かれ、前日に作成したワークシートをもとに1人につき授業15分＋意見交換15分という形式で模擬授業を行った。使用できるのはホワイトボード2面のみということで、普段の授業で Power-Point を使用している私としてはとまどいもあったが、自身の授業方法について他の先生方から細かなフィードバックをいただくことができた。また、他の先生方は学生の授業参加を促す工夫を模擬授業の中でうまく実践されており、それらを私自身が学生の立場で体験できる貴重な機会ともなった。模擬授業終了後は再び参加者全員で集まり、各グループでの討議や模擬授業で得た成果の全体共有を行ったのち、ワークショップは閉会となった。

　今回のワークショップでは、普段あまり接する機会のない他分野の先生方と情報共有を行うことができ、また、模擬授業を通して自身の授業方法を客観的に見つめ直すことができた。今回得た知識と経験をもとに、今後の授業の質をより高めていきたいと考えている。

文学部の取り組み　教員インタビュー
「教育の質保証に向けた取り組みの実質化」

今回は、文学部の教育の質向上に向けた取り組みとして、初年次教育科目の一つである「基礎ゼミナール」の事例にスポットを当てお話を伺いました。

文学部文学科　増田　久美子　教授
文学部文学科　伊澤　高志　准教授

――本日はお忙しいところお時間をいただきましてありがとうございます。初めに、「基礎ゼミナール」の概要をご紹介ください――

本科目は、文学部の初年次教育の一つとして位置づけており、文学部の学びに必要な学習スキルと知識を修得すること、および高等学校教育から大学教育への円滑な移行と学生生活の基盤づくりという目的のために設計されました。

この科目の授業設計における特徴としては、①学科やコースが異なる学生を集めたクラス編成、 ②1クラスにつき異なる学科の教員3名が授業を担当、 ③図書館と連携した授業、 ④アクティブ・ラーニングを取り入れた授業、 が挙げられます。

――学科を超えたクラス編成や、授業設計の背景およびねらいは何でしょうか――

以前より文学部では外部業者と連携して、新入生意識調査を行ってきました。その分析結果の一つとして、「具体的な目的意識が希薄なのではないか」ということが浮き彫りになりました。それは、初年次における退学率の高さにも表れています。そこで、まずは文学部の学びを知り、視野を広げ、自分の学ぶ領域を狭めずに選択肢を多く持つことが必要なのではないかと考え、初年次教育の再構築を図りました。そのような経緯から、この「基礎ゼミナール」では自身の所属する学科だけではなく、異なる学科の学生とともに、異なる学科の教員から多様な学科専門教育の一端を学ぶことを大きな柱としています。また、それぞれのクラスには、スチューデント・アシスタント（SA）も数名配置しています。SA がグループワークのファシリテーションに入り議論を活性化させたりすることで、異なる学年の学生とのコミュニケーションの場ともなっており、授業内で縦のつながりを醸成する機会となっています。

このように、「基礎ゼミナール」を通じて文学部での学びを知り、興味関心の幅を広げ、学科を超えた友人と出会うことで大学生活を円滑なものにし、その結果として学習意欲や目的意識を向上させることをねらいの一つとしています。

――「基礎ゼミナール」の授業内容の特徴をお聞かせください――

「基礎ゼミナール」では、全15回の授業のなかに、図書館講習を取り入れています。これは図書館と協働しておこなっているもので、図書館職員が講師となり、資料の検索方法、データベースの使用方法を学びます。授業構成はかなり工夫されており、学生が楽しみながら学べるような内容になっています。図書館が活用できれば、大学での学びは大幅に質が向上します。初年次にこのような学習をすることで、2年次以降の学びがスムーズになり、教員の指導も問題なく受けることができます。文学部の学びにおいては、データベースを使いこなすスキルは大変重要です。図書館の膨大な資料やデータを利用した学習を進めることができ、授業外学習も進むのではないでしょうか。

また、自分で考える力を養うために、授業の基本的な実施方法としてアクティブ・ラーニングを取り入れています。そのなかでもグループワークを中心に実施していますが、グループで議論をし、一つの結論を出すことは、考える力を養うとともに、他人の考え方を知る・理解する機会として非常に有効です。しかし、導入検討時には、教員から戸惑いの声も上がりました。授業によってはそのような授業手法がそぐわないと思われるものもあるからです。しかし、教員向けにアクティブ・ラーニングに関する研修を実施するなどして、教員にも自身の授業方法を見直してもらう機会を作りました。このように、「基礎ゼミナール」を通しては、教員の FD 活動の場ともなっています。

――「基礎ゼミナール」における学習成果の可視化や成績評価についてお聞かせください――

学科を超えたクラス編成での必修科目であることもあり、どのような成績評価基準とするかは非常に難しい課題だと感じています。現在は、グループワークや

レポートの取り組み姿勢、自分で考えて表現することを重視しています。これらは試験勉強ができれば評価されるものとは異なり、学びへの姿勢を問う評価となっています。

また、成績評価とは異なる視点ですが、「基礎ゼミナール」で受けた別学科の教員の授業を、2年次に積極的に受講している学生がいます。自身の学科以外の分野について学ぶことで、興味関心の幅が広がった一例であると考えられ、「基礎ゼミナール」の一つのねらいが達成されたのではないかと感じています。

――文学部のディプロマ・ポリシーを担保するためにどのような学習成果および教育プロセスを重視していますかー

文学部のDPのキーワードとしては、「分析・判断力」「専門領域を超えた課題考察力」「幅広い教養」「異文化理解」「英語力」などがあります。自然科学分野に比べると、学習成果やそのプロセスが見えにくいですが、やはり4年間の学びを支える基礎教育をしっかりとおこない、幅広い教養を身に着けることでそれぞれの専門性を深める教育ができるのではないかと思います。

また、4年間の集大成である卒業論文は学習成果を可視化し、評価する一つの指標となっています。課題の発見から一つの答えを出すまでのプロセスがここに凝縮されているからです。卒論に取り掛かるまでに、自身の興味関心を掘り下げられるものと出会うことや、参考文献や情報の収集など、論文を書き上げるための技術などを身につけていることが必要です。そのためにも「基礎ゼミナール」の取り組みはレベルの高い卒論の執筆のために大いに役立つものであると考えます。ちなみに卒論は2万字が必須ですが、他大学と比べてもかなりのボリュームがあります。ここを乗り越えると学生にとっては相当な力がつくので、社会に出てもこの経験が生きるのではないでしょうか。

しかし、外からはもちろん、学生自身もそういった学びのプロセスなどについてよく理解できていなかったのは事実だと思います。社会に向けた説明責任もありますので、今後は誰がみても分かりやすいカリキュラムの編成や科目の見直しなどが必要になるかもしれません。

――今後の課題や文学部生に期待することをお聞かせください――

この「基礎ゼミナール」の取り組みは昨年度から始まったので、まだ十分な検証ができる状況ではありませんが、学生の4年間の学習成果にどこまで変化があるか、ということは注視すべき点です。導入から4年経過した後は、再びその内容を見直し改善していく予定です。

最後に、文学部の卒業生として社会に出る際には、「言葉の重み」を大切にしてほしいと思います。現代では至るところで言葉が軽く扱われていますが、そこで立ち止まって、言葉について深く考えることは、物事に対する判断力や考察力に直結するからです。そして広い視野を持った考え方や、課題を発見して解決する力などを身につけたうえで、社会のなかで自分の役割を知り活躍してほしいと願っています。

――ありがとうございました――

インタビュアー
学長室総合経営企画課　　大石大祐　佐々木愛美

Focus! 図書館講習

学生自らが図書館資料やデータベースの使い方等を実践しながら、図書館を利用するための基礎知識を身につけるプログラムを図書館職員が担当して実施しました。受講前後の理解度をセルフチェック方式で測り、授業内容の改善や、学生自身に達成感を味わってもらうために活用しています。グループワークを通した実践を行うことで、他者からの気づきを得ながら、学生生活の中でより身近に図書館を感じてもらい、基礎知識の習得に繋げることができました。

今回の授業内容を基に、新たな学修プログラム「りるとれ」を作成し、学部学科・学年問わず受講してもらっています。文学部では、論文検索方法について、図書館独自の学修支援を活用する計画がたてられるなど、基礎学修のその後に繋がったように感じています。（図書館職員）

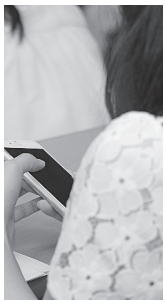
令和元年度 FD 活動報告

令和元年度に実施した立正大学における FD 活動についてご紹介します。

主な FD 活動内容

5/27	第 1 回 FD 委員会　開催 ※学部・大学院合同開催
6/5	新任教職員研修会　開催
7/1~13	**授業改善アンケート（1 期）実施** 動画教材活用授業アンケート　実施
7/1~27	アクティブ・ラーニング実態調査（1 期）実施
8/6～7	私立大学連盟主催 FD 推進ワークショップ　参加
9/10	**外部評価委員会　開催**
10/5	全学 FD 研修 「EdTech を活用した新しい学び」開催
10/17	第 2 回 FD 委員会　開催 ※学部・大学院合同開催
10/1~31	大学院生の教育・研究環境に関するアンケート 実施
11/30	**大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅠ （アクティブ・ラーニング）シンポジウム　開催**
12/2~14	**授業改善アンケート（2 期）実施** 動画教材活用授業アンケート　実施
12/2~24	アクティブ・ラーニング実態調査（2 期）実施
12/11	障害学生支援に関する FD 研修会　開催
12/13	全学 FD 研修 「やる気と成果を引き出す授業デザイン」開催
1/21	「自己点検・評価　入門研修会」開催
3/9	第 3 回 FD 委員会　開催 ※学部・大学院合同開催

〈授業改善アンケート（1，2期）〉



今年度も Web 方式で実施しました。全学の回答率を見ると、1期は59.2%、2期は52.1%となっており、昨年同期と比べて前者は2.9ポイント、後者は4.8ポイント増加しました。より多くの学生の声を聞くためには、実施方法等のさらなる改善が必要と考えられます。

〈外部評価委員会〉

「多様な学生の修学支援」をテーマに、本学の現状や課題を学外から選出された委員と意見交換をおこないました。ここで出た課題は、本学の自己点検結果リスト（タスクリスト）に掲載し、全学課題として共有・改善を図ります。

〈大学教育再生加速プログラム（AP）シンポジウム〉

大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅠ採択校によるシンポジウムが、本学を会場に開催されました。学内外から約80名の参加があり、当日は6年間にわたる各大学の事業成果の報告のほか、ポスター展示、パネルディスカッションも行われ、貴重な情報交換の場となりました。

立正大学 FD 活動の詳細は、大学公式サイトより閲覧できます

Rissho University FD News Letter Vol.24

令和2年3月31日発行

編集発行：立正大学　学長室総合経営企画課

〒141-8602　東京都品川区大崎4-2-16

TEL：03-3492-6872　FAX：03-5487-3340　URL：http://www.ris.ac.jp